The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	視覚動詞「みる」・「みえる」の意味記述
Author(s)	蔦原, 伊都子
Citation	語文. 1983, 42, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

視覚動詞「みる」・「みえる」の意味記述

蔦原伊都子

1　はじめに

動詞の中で、「みる」「みえる」「きく」「きこえる」「におう」「味わう」など、五感に関する動詞を感覚動詞（注1）と名づけることがある。これらの動詞は、ある感覚によって外界の対象を認知することを表現する時に使われる。我々のことばは、窮極的には、すべて感覚による対象認知に基づく判断であるといえるが、日常生活では、普通、判断の部分だけを表現し、その判断がどの感覚によるかまでは表現しないことが多い。感覚動詞は、認知しているのだというそのこと自体を表現している点で、しかもどの感覚によるかを示している点で、他の動詞と区別されうる。

本稿は、感覚動詞のうち、視覚動詞である「みる」と「みえる」について、その意味と用法、自動詞と他動詞による違いなどを考察しようとするものである。これらの動詞は、

主体は　対象を　みる。

（主体には）　対象が　みえる。

という文型をとる。対象とは、外界に存在するさまざまな刺激・もの・ことがらをいい、主体とは、その対象を認知する存在（多くは人）をいう。この主体と対象の二つに注目して考えていきたい。

2　みる

「みる」は用途の広い語で、国語辞典にもいくつかの意味があげられている。しかし、その意味記述は羅列的で、必ずしも整ったものとはいえない。

「みる」は目によって対象を認知する行為をさす語であるが、厳密には、この行為は二つにわけられる。

(a)対象の存在を無意志的に認知する行為

①鳥（ペード）は車の前方に死んだ雀が一羽、雨に濡れてころがっているのを見た。（個）

②そして、三人のうしろに、司祭は自分の同僚であるガルペの姿を見た。（沈）

これらの文では、主体は、対象を目にする以前には、それに対する認識がない。見ることイコール存在の認知であり、発見の意味に近い。「みいだす」「みつける」といった語に置きかえが可能である。私は、感覚動詞の基本的意味を、この存在認知にあると考える。

(b)ある時間対象と意志的にかかわりあう行為

③最初は何をしているのやら分からなかったが、なおよく見ると、二つの人形に接吻させているのらしく…(細)

④出発の朝、私はじっと園子を見ていた。(仮)

ここでは、対象を目に入れる方法が偶然か意図的かは問題ではない。目に入れた後、主体が見ようという意志を持って対象を見る行為である。この意味での「みる」は、感覚動詞というよりは、「走る」「食べる」など意志的な行為を表す動詞に近くなる。

以上述べた(a)(b)の二分類（注2）は、視覚以外の感覚にも適用できる。そこで、以後、動詞が(a)の意味で使われたものを、感覚動詞の純感覚的用法、(b)の意味で使われたものを、感覚動詞の意志的用法と呼ぶ。(a)と(b)は連続的で、区別がむずかしいが、文を理解する上で、(a)の方に重点が置かれた表現か、(b)の方に重点が置かれた表現かの判断は、ある程度可能であろう。また、「みる」をはじめとする感覚動詞には、本来その動詞が意味している感覚（たとえば「みる」なら視覚）が問題にされなくなった用法がある。それらも、基本的には(a)または(b)の用法から転じて生まれたものである。このような用法を、感覚動詞の非感覚的用法と呼び、(an)(bn)で表す。そうすると、今まで羅列的に並べられていた「みる」のいくつかの意味が、(a)と(b)という二つの系統に分けられることに気づく。そこで、このような見方により、既成の辞書の記述も参考にして、「みる」を次の六つに意味分類しようと思う。(注3)

(a)目によって対象の存在を知る
- (a1)経験する
- (a2)判断する

(b)ある時間継続して対象を目にする
- (b1)調べる・試す
- (b2)見守る・世話をする

用法的に見ると、(a)は純感覚的用法、(a1)(a2)は純感覚的用法に通じる意味をもつが、視覚によっていないので非感覚的用法である。(b)は意志的用法、(b1)(b2)は意志的行為だが視覚によっていないので非感覚的用法である。以下、順次意味によってそれぞれどのような対象をとるか細かく見てゆくことにする。

(a)目によって対象の存在を知る

前述した、存在認知に重点のある純感覚的用法である。とりうる対象は、視覚でとらえられるもの、つまり、音・におい・味以外のものすべてということになる。ただ、視覚でとらえられるものといっても、それをことばとして表現する場合の抽象度やとらえ方はさまざまである。「花」「人」「机」「川」などは、視覚性と触覚性を持ち、普通の意味で存在するといえる。これらは、一番自然にとらえやすい単位としての視覚対象であろう。（以後、この種の対象を「もの」と表記する。）

⑤なんと、この男はヒゼンのクラサキ村で二十四人の信徒たちが藩主から水磔に処せられた光景を見たのだそうです。(沈)

⑥ぞうっと寒気を催させる肌の色の白さを見ると、俄に汗が引っ込むような心地もして…(細)

次に、右例のように「もの」より少し抽象化の進んだ語が対象となる場合も多い。これらの語は、いってみれば、すべて、個々の「もの」のあり方をいろいろな角度から述べたものである。たとえば、「光景」は、いくつかの「もの」を全体的に把握した表現であろう。

「色の白さ」は、「もの」を「もの」としてとらえず、その一面をとりだして性格づけた表現であろう。

⑦こうして襷掛で働いているところを見ると、どうしても一個の独立した庵の主人らしくはなかった。(門)

⑧鳥は…白衣の男が、人だかりをわけて救急車のひらかれている後尾に入りこんで行くのを見た。(個)

これらの例では、「もの」のあり方や動きなどを、「〜ところ」「〜の」という語によって体言化し、「みる」の対象としている。たとえば⑧は、「鳥は…入りこんで行く白衣の男を見た」というのと意味的には同じである。ただ⑧のようないい方の方が「もの」のとらえ方が動的だといえよう。

⑨土屋の屈託を見ると心が穏やかでなくなって…(美)

⑩生まれてはじめてこの連中が人の心のあたたかさを見たからです。(沈)

右の例の他、「苦しみ」「屈辱」「悲しみ」など、内的な心理や感情を対象にとった表現がある。たとえば「苦しみ」であれば、「苦しみ」という目に見えるものがあるわけではなく、直接の視覚対象になる人物の顔つきや行動やことばなど、いろいろな外的状態を総合して、「苦しみをみる」と表現する。「みる」の使用範囲の広さはそこにも現れている。「苦しみをきく」といえば、それは、一般に声として出された、あるいはことばとして語られた苦しみに限られる。ところが「苦しみをみる」は、視覚が中心ではあるものの、他の感覚も総動員した全的な認知に使えるのである。

このように、現実に存在するのは「もの」でしかありえないが、そのとらえ方はさまざまである。たとえば、先ほど「もの」に属する語として「川」をあげた。「川をみる」といえば、「もの」を対象にとった文である。ところが、「川の流れをみる」といえば、これは、本来は動的な性格をもつ「流れ」という、「もの」ではない語が対象となっている。また、「川の流れの清さをみる」といえば、今度は、その「川」が持つ「清さ」という性質が対象となっている。このように、いくつかの「もの」の集まりや動きを全体的に把握してできた語、「もの」の動的な一面、あるいは性質や状態を表した語など、さまざまな語が「みる」の対象となる。

(a1)経験する

主体自らにおこった出来事や体験を対象にとる用法で、「みる」の視覚的な意味はほとんど失われてしまっている。

⑪やはり櫛田医師の診察の通りで、明くる朝流産を見たのであった。(細)

⑫十四日になってもまだ時々少量の出血を見、…(細)

対象のとらえ方は必ずしも視覚によらないが、主体の意志とは無関係に起こる出来事の認知と考えられる。「みる」を使ってこういう表現がされた場合、主体は、出来事を時間的な幅のあるものとしてとらえているというより、そういう出来事が自分の身にふりかかった、起こったという意識でとらえている。その意味で、認知・発見に重点のある(a)の用法に通じる。

これが慣用句的になると、

⑬自分一人馬鹿を見た、欺されたと…(細)

⑭「永居すればするほど、ろくな目を見ませんからね」(帰)

といった表現となる。⑬⑭に類するものに「恥をみる」「ひどい目

をみる」などがある。

⑮鳥は、夜明けの寒さに不満げに唸りながら、辛い夢を見た。(個)

「夢」は、実際には視覚によっては認知されないきわめて個人的な経験であるといえるので、さしあたりこの項に入れた。しかし、この項に属する他の言い方が継続の「～ている」形では使えない(×「恥をみている」)のに対し、「夢をみる」は、「夢をみている」と継続形で使える。「夢」は、時間的幅を持ち、あたかもテレビのように「みる」ことができるものととらえられているのである。

(a2)判断する

⑯父は太田夫人を美しいと見た時もあったのだろうか。(千)

⑰たとえ、信徒や聖職者たちが私を布教史の汚点と見ようとも、そんなことはもうどうでもよいのだ。(沈)

「みる」の対象は、普通「を」格をとるが、その下に「～と」という形をうけることがある。「～と」の部分は「を」格で示される対象に対する主体の判断を表している。たとえば⑰では、主体である「信徒や聖職者たち」が「私」に対して、「布教史の汚点」という判断を下す。

⑱ピアノの音が止んだと見て、妙子は写真を抽出に戻して…(細)

⑲雪子をさしおいて妙子が先に結婚することは、尋常の方法ではむずかしいと見て…(細)

右の二例では、「を」格の部分がなく、「～と」までが一つの文として「みる」にかかっている。

このように、文型としては「～を～とみる」と「～とみる」の二種があるが、どちらも「みる」は、「思う」「判断する」というような語でおきかえられる。そして、判断に使われる感覚は、視覚の場合もあるが、一概には決められない。⑱などは「ピアノが止んだ」というのだから聴覚による判断である。このように、この文型では「みる」の視覚的な意味は失われてしまっている。(a)が視覚的発見だとすれば、これらは心理的発見だといえよう。そういう意味で、やはり(a)の用法に通じる点がある。

(b)ある時間継続して対象を目にする

(a)が無意志的認知に重点がある純感覚的用法であるのに対し、視覚によってはいるが、意志的な行為に近くなった(b)意志的用法である。主体は、何らかの動機なり目的なりを持って対象を「みる」。そこが、目にすることによって初めてその存在を知るという(a)の意味と、根本的に異なる点である。実際には、(a)と(b)は厳密には区別しがたい。ともに視覚によっているから、対象としてとりうる語は(a)と全く重なる。

しかし、対象によっては、この(b)に入ることが比較的はっきりしているものがある。

⑳節子はその女優の映画を見たことはなかった…(仮)

㉑同じ劇場で何年かあとに見たダンテという奇術師の舞台には…(仮)

それは右の例のように、対象が「もの」ではなく、その実質的な内容をさしている場合である。この時は、ある程度の時間的な幅が要求されるため、瞬間的な認知の意味にはとりにくくなる。

対象が、文字で書かれた「もの」であり、その内容を把握するという意味で使われた時にも、「みる」は継続行為を表すことになる。

㉒宗助は五六日前、伊藤公暗殺の号外を見たとき、…（門）
㉓そのピアノの音色には、手帳を見ながら作った不出来なお菓子のような心易さがあり…（仮）

これらは、「読む」という意味に近い「みる」であるが、対象が文字化されたものであるためにこういう意味がでてきたのであって、「みる」の意志的用法としてまとめてよいであろう。

（b_1）調べる・試す

㉔そして彼女は味をみているオランウータンみたいに下唇をとがらせて…（個）
㉕印度の占いが水晶の玉を見詰めて、運命を見るがね。（帰）

(b)で、みる行為には、主体の側に、何らかの動機や目的があると述べた。右の例で使われた「みる」は、対象を調べることによって、求めている何かを得るという、主体の目的意識がいっそうはっきりした行為である。この表現では、何かを得ようという、主体の対象への働きかけが中心で、対象から、求めているものを得たかどうかまでは問題にしていない。対象として、視覚でとらえられる「もの」をとるのは(a)(b)と同じである。「辞書をみる」「手相をみる」「医者が患者をみる」「先生が試験の答案をみる」などの「みる」は、視覚性が強く、(b)と連続的である。

一方、この意味で「みる」が使われる場合には、視覚でとらえられないことがらも対象となる。

㉖「おふろ、みてくれる？」

たとえば、日常生活の中でよく耳にする右のような文で、話し手は「浴槽をみてくれ」といっているわけではない。この文は、1「おふろの水の量をみてくれ」、2「おふろの湯かげんをみてくれ」の二通りに解釈できる。1は、水がどれくらいの高さまで入っているか見るのだから視覚を使った行為であり、「みる」の視覚性は生かされている。ところが2では、湯の熱さを調べるのだから、触覚を使うことが必要で、「みる」が持つ視覚性の意味は失われてしまっている。同様に、「音をみる」「においをみる」「味をみる」「脈をみる」などは、「みる」の視覚性が失われてしまった用法である。この場合、同じ行為を表現するのに異なった対象が使える。たとえば、「医者が患者をみる」と「医者が病気をみる」「手相をみる」と「運命をみる」、また㉖は1・2のようにいいかえられた。つまり「もの」的名詞と、抽象的なことがら名詞のどちらでも対象にとれる。前者の場合、「みる」は視覚性の強い(b)の意味に近づくし、後者の場合、逆に視覚性が失われて調べるという意味が強くなる。

「みる」が「～か」という文を上にうけることがある。「～か」の部分は、主体がどういう目的で対象を見るのかを示している。

㉗「先方の腹は、顔のシミがどんな程度か、もう一度見たいのやないかしらん」（細）
㉘とうとう庇の蔭になっている小さい木札にどんな字が書いてあるか見ずにいたのである。（雁）

右の二例は、視覚によってとらえることのできる対象であるから、ここで使われている「みる」は(b)の意味だとも考えられる。繰り返すが、対象が視覚性の「もの」である時には、(b)と(b_1)は連続的なのである。

（b_2）見守る・世話をする

㉙「…自分が死んだ後は、菊治さんが娘を見てくれやしないか」（千）

㉚園子の小さい妹たちの英語の勉強を見てやったり…（仮）

㉛「悦ちゃんのピアノ見たげてるらしい」（細）

㉜雪子が…悦子に捆まって稽古を見てやっているのであろう。（細）

(b_1)と厳密には区別できないが、(b)より、もっと対象に対して積極的な働きかけがある。その具体的な働きかけの内容は対象によりさまざまである。たとえば、㉚や㉛なら、わからないところを教えたり、まちがったところを直したりすることだろう。また、㉙は後述する「面倒をみる」と同じ意味である。いずれにしろ、もはや視覚とは関係のない行為になっている。

「みる」がこの意味で使われる場合、「やる」「くれる」「もらう」などの受給の補助動詞を伴うことが多いのが特徴である。

また、(b)と同様、同じ行為を表すのに、「もの」的名詞とことがら名詞のどちらでも対象にとれる。㉛㉜は『細雪』の同場面からの引用で、ピアノの稽古をみるという意味なのだが、㉛では「もの」的名詞である「ピアノ」を、㉜ではことがら名詞である「稽古」を対象にとっている。

この意味に属する「みる」を使った慣用句的ないい方に「面倒をみる」がある。「〜の面倒をみる」という形で使われることが多く、「〜の」の部分には、植物・動物・人間など生きている「もの」がくる。

㉝「それは跡へ綺麗なお母さんが来て、面倒を見てくれますでしょう」（雁）

㉞「子供の面倒をみてもらうばかりでも、大役だからな」（雁）

やはり、受給の補助動詞を伴うことが多い。

3　みえる

他動詞「みる」に対応する自動詞が「みえる」である。「（主体には）対象がみえる」という文形をとり、主体は右のような形で文上に現れることもあるが、表現されない場合の方が多い。しかし、「みえる」といった時には、必ずその文の背後に対象を目にしている主体の存在が隠されている。

39ページで「みる」行為を(a)(b)二つにわけたが「みえる」はこれに対応する分類ができない。この動詞は、主体の意志の有無にかかわらず対象が自然に目に入って来るという状態を表す。したがって、(b)の意志的用法はない。見ようという主体の積極的な意志がないという点で、(a)と重なる点もあるが、(a)が瞬間的な認知に意味の重点があるのに対し、「みえる」は、認知をも含めたもっと状態的な面が強い。また後に述べるように、可能の意味になると、発見・認知という(a)の特徴は全くなくなってしまう。このように、「みえる」は(a)とも完全には重ならないため、その用法を(a)と表し、次の二つに意味分類しようと思う。（注4）

(a)対象が自然に目に入る　→　(a_1)ドウドウ思われる

(a)対象が自然に目に入る

㉟…山門の背後にさして大きくない寺が見える。（門）

このような例が「みえる」の一般的な使われ方である。前述したように、この語は、主体による対象認知とともに、対象の存在という

状態的な意味までを含みもっている。また、ある対象に「みえる」が用いられるのは、対象が、主体から距離的に離れたところにあったり、何かのかげに隠れて一部分だけが目に入っていたりする場合が多い。これらの意味的特徴は、後で述べる可能動詞としての「みえる」とかかわるので、そこで改めてふれる。

対象となる語は、「みる」の(a)に入るものと重なり、視覚でとらえられないものはとれない。また、意志的用法がないこととも関連するが、対象が、「もの」の、時間的幅を持つ実質的内容の方を意味することもない。

ただ、次にあげるような、本来は視覚的対象とはいえないような対象をとる場合もある。

㊱母の立場が、その運命的なものが、今更、伴子に、はっきり見えた。(帰)

右の例で、「母の立場、その運命的なもの」は、もはや視覚的対象とはいえず、「みえる」は単なる認知の意味に近くなる。「みる」の場合と同様、一口に視覚的対象といっても、かなり広い範囲を含みうるのである。

㊲菊治は記憶でそのあざが見えるのだった。(千)

これは、対象が目の前にあるのではなく、過去の視覚対象が想像の働きで「みえる」といっている。「目に浮かぶ」と同じような意味で使われるものである。このような文では、実際には対象が存在しないのだから、視覚とはいえないが、あくまでも主体にだけは、対象があたかも眼前に存在するように「みえ」ているのである。したがって、意味的には、視覚による認知の延長上にあると考えられる。

㊳今年の流行は、もう先が見えている。

㊴自分の才能の限度が見えてしまって…(帰)

㊲が過去の存在を対象にとっているとすれば、この二つは、現在における未来の認知である。やはり対象と呼べるようなものは眼前には存在しない。㊲㊳㊴のような用法は、後で述べる可能動詞としての用法に近いともいえる。現実の時間帯ではないことが、主体にはとらえられるという意味で、可能になるわけである。

《a_1》ドウドウ思われる

「みえる」には、「ダレナニがドウドウみえる」という、その見え方が焦点になったいい方がある。「ドウドウ」の部分は、次のようないくつかの形態がある。

1)形容詞連用形+みえる

㊵衣裳が派手であるから若く見えるというのでは…(細)

2)助動詞連用形+みえる

㊶一番丈夫そうに見える幸子が…(細)

3)…とみえる

㊷全盛と見えた大正の末期には…(細)

㊸ローゼマリーは悦子のことを「エッコ、エッコ」と呼んでいたが、誰か注意する者があったと見えて、間もなく、「エッコさん、エッコさん」と呼ぶようになり、…(細)

4)動詞連用形+てみえる

㊹花婿の風采があまり爺々して見えるのでは…(細)

5)名詞+にみえる

㊺写真の顔が…爺むさく、五十歳以上の老人に見える。(細)

用例からもわかるように、「ドウドウ」の判断は視覚によることが多いが、必ずしもそうではない。㊸では「誰か注意する者があった」と判断したのは、今まで「エッコ」と呼んでいたローゼマリーが、「エッコさん」と呼び方を改めたからであり、これは聴覚が判断の決め手になっている。このように、「みえる」が使われていても、判断の方に重点があり、その判断がどの感覚によるかは問題にならなくなった場合もある。

「みる」にも同様の使い方があった。（42ページ参照。ただし「みる」の場合、判断を表す部分の形態は、ほぼ「～と」に限られ、「みえる」のように多様さはない。）「みえる」と「みる」ではどう違うのだろうか。

㊻私には彼が年より若く見えた。

㊼私は彼を年より若く見た。

右の二例でわかるように、「みえる」では対象とその対象のあり方が前面におし出されているのに対し、「みる」では主体の積極的な判断に重点がおかれている。このような差はあるにしても、こういった表現がされた場合、主体にとって主観的にそうなのであって、事実はそうでない場合もありうる。

ここで、「みえる」という動詞の特殊性について少しふれることにする。金田一春彦氏の動詞の四分類（「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』所収　麦書房　昭五一）でも、「みえる」は、「状態動詞」に属するやや特殊な動詞になっている。動詞でありながら、存在詞と同様、形容詞的なのである。その根拠として、終止形で現在の状況を表すことができる、命令形が作れない、などがあげられる。また、後接できる助動詞にも制限があり、助動詞のつかない形か、過去を表す「た」のついた形で用いられることがほとんどである。「た」形が多いのは、小説においては地の文であるが、それも、その表現された場面における現在であることが多い。「みえる」は、その語が使われる場面との結びつきが強い動詞であるといえる。

一方で、「みえる」には、主体が対象を目にしていなくても使える用法がある。それが可能動詞としての用法である。

㊽「うん、港の船が見えるよってに、子供は喜ぶかもしれんな」（細）

㊾私は視力検査表の一番下まで見えます。

この用法は「みえる」が状態的な意味を持っていることからでてくるものであろう。つまり、主体が見ようと思えば見ることができるという主体あるいは対象の状態を表しているのである。「みえる」が、動詞でありながら形容詞的で、そのままの形で現在を表すことができ、助動詞を伴って使われることが少ないこと、対象を目にしていなくても使える可能の意味を持つことと、「みる」がそのままの形で現在を表せず、助動詞を伴って用いられるということとは通じている。「みる」は対象を認知することを表す。ある人が、「私はこの窓から山を見た」といえば、その人は今は山を見ていないが、過去のある一時点において山を実際に目にしたということを述べている。「みる」が助動詞を伴って時間的に変容をうけても、その助動詞が表現する時点で、主体の対象認知ということが前提にある。実際的な対象認知という意味を持つからこそ「みる」は、助動詞を伴って、その「時」を限定する必要がある。ところが、「みえる」

に可能の意味があるということは、その可能を作り出しているのが、その場の客観的状況であれ、見る主体の能力であれ（状況と能力とは、表裏一体である）、とにかくポテンシャルなものだから、時間性を超越している。小説の地の文の動詞は、普通、過去形中心だが、「みえる」に関してはしばしば現在形で用いられることがあるのもそのためである。時間を超越しているということと、先ほど述べた、その語の使われる場面との結びつきが強いということは矛盾するようだが、時間を超越しているからこそ、ある特定の時間、特定の場面で用いられた時には、その時その場の状況を表せることにもなる。

また、「みえる」が、特定の時間・場所において対象が自然に目に入るという(a)の意味で用いられる時に見られる、45ページ上段1行～45ページ上段4行で述べた特徴も、この動詞の可能的意味の表れである。つまり、この語自体、すでに、人間の感覚の限界を含んでいるのである。（注5）

4　おわりに

視覚動詞「みる」「みえる」について、主にどんな対象をとるかを中心にみてきた。

まず、「みる」は、六つに意味分類をしたが、それぞれの間の区別は十分明確だとはいえない。しかし、この動詞には、明らかに視覚による認知の意味からはずれた、意志的な行為を表す意味があり、その場合には、視覚でとらえられない語も、対象にとれる。また、おのおのの用法における意味と対象との結びつきは流動的である。たとえば、「私はテレビをみた」といった場合、この文は、「テレビ（「もの」としての）をみつけた」「テレビ（「もの」としての）をみていた」「テレビ（放映されている内容）をみていた」「故障したテレビを調べていた」など、何通りにも解釈することができ、どの意味になるかは、文脈や場面によって判断される。対象となる語の多くは、「テレビ」の例のように、それが置かれた文脈や場面によって「みる」の意味を柔軟に変化させることができる。ところが、「味」「音」などのように、視覚によってとらえられないことがはっきりしている語を対象にとる場合には、「みる」の意味が必然的に決定されてしまう。

一方、「みえる」は、敬語の「来る」という意味になる使い方は別として、他の用法にはすべて連続的な面があり、「みる」のようにいくつかに意味分類することさえむずかしい。この語は可能と自発の意味をあわせもち、文脈によって、可能の意味が強くなったり、自発の意味が強くなったりするのである。

本稿は、多義動詞の意味分析の一つの試みである。一つの動詞の意味決定には、その語と結びついて文を形成する構成要素となっている他の語、さらには、文が置かれている前後の文脈などが深くかかわっていることがわかる。また、意味的に共通とされる自動詞と他動詞を対にしてとりあげることによって、それぞれの意味の違いがはっきり浮かびあがってくる。

感覚動詞をとりあげたのは、基本的な意味（感覚による認知）がはっきりしていることと、人間のあらゆる活動の基本になるという点で感覚そのものに興味があったからである。ここでは視覚動詞のみを扱ったが、今後、他の感覚動詞についても考察を進め、感覚という一つの分野における全般的特徴や、感覚ごとの特徴の記述にまで及びたい。

注

1　この名称は『動詞の意味・用法の記述的研究』（国立国語研究所・宮島達夫・昭四七）の中で用いられている。

2　視覚については、この二つ以外に、視線を向ける行為が考えられる。

。爺さんは…門の戸の開いた時、はっと思って、湯呑を下に置いて、上りの方を見た。（雁）

この文では、主体は、対象を目にする前に、それに対する何らかの認識があり、みようという意図を持って目を向け、対象を目にする。これは視覚という感覚の特殊性から生まれる行為である。

3　その他に「みる」は、「それみたことか」「今にみろ」「ざまあみろ」といったようなきまり文句の中で使われることがある。この場合にも「みる」の視覚性は失われてしまっている。

4　その他に、対象が人間に限定され、話し手のところへ「来る」という意味の敬語として使われる「みえる」がある。この場合、対象である人にとっては、来る行為は意志的でも、「みえる」はその対象を迎える側から述べられた敬語だから、やはり無意志的といえる。歴史的にみれば、対象となる人が主体の視野内に現れるということから来るという意味になったのであろうが、現在普通に使われる「みえる」とは、文法的にもやや性格を異にする特殊な用法といえる。

5　『知識の構造』80ページ参照（沢田允茂　ＮＨＫ市民大学叢書　昭四四）

用例収集に用いた小説

『門』　夏目漱石　新潮文庫
『仮面の告白』　三島由紀夫　新潮文庫
『細雪』（上）（中）（下）　谷崎潤一郎　新潮文庫
『美徳のよろめき』　三島由紀夫　新潮文庫
『個人的な体験』　大江健三郎　新潮文庫
『沈黙』　遠藤周作　新潮文庫
『雁』　森鷗外　集英社日本文学全集5
『千羽鶴』　川端康成　集英社日本文学全集40
『帰郷』　大仏次郎　集英社日本文学全集54

※本稿中では、引用例の下に、略して書名を記した。なお、何も記していないものは作例である。

参考文献

。『意味論』ピエール・ギロー（白水社　昭三三）
佐藤信夫訳
。『構造的意味論』国広哲弥（三省堂　昭四二）
。『言語と意味』ウルマン　池上嘉彦訳（大修館　昭四四）
。『形容詞の意味・用法の記述的研究』西尾寅弥
（国立国語研究所　昭四七）
。『意味論』池上嘉彦（大修館　昭五〇）
。『基礎日本語』森田良行（角川小辞典　昭五二）
。「語彙的な意味のあり方」奥田靖雄
（『日本の言語学第5巻意味・語彙』所収　大修館　昭五四）
。「感覚・感情語彙の歴史」山口仲美
（『講座日本語学4語彙史』所収　明治書院　昭五七）